秋の幽霊

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋の幽霊

【Ｎコード】
Ｎ４１３４Ｆ

【作者名】
りきてっくす

【あらすじ】
人は自分の命を失ってみて初めてその尊さに気付くのか？ある秋晴れの朝、私は公園ベンチに腰を掛け澄んだ青空を見上げていた。今日は私の四十九日、彼岸へ旅立つ日なのだ……。

秋の幽霊（上）

暁光（ぎょうこう）の、鋭角に差し込む木漏れ日の暖かさを頬に受けながら、私は、ただ、サワサワとうねる干からびた葉擦れの音を聞くともなしに聞いていた。未明まで乱暴にアスファルトを打った宿雨（しゅくう）はもうすっかり上がって、澄清たる秋晴れの空を候鳥（こうちょう）の突っ切る姿が、凛と漲る水たまりの片隅に映り込んでいる。

耳を澄ませば、琅々と珠の触れ合う音（ね）が聞こえてきそうなほどに、空気は澄み渡っていた……。

定規を当てて引いたようなヒコーキ雲が、ゆっくりと碧羅（へきらのてん）の天に溶けてその純白の密度を失ってゆく様を仰いでいると、私の鼻先を、二匹つながった赤トンボがこれ見よがしについと横切った……。

今日は、良い日に違いない。

私が肥満気味の体重を預ける公園ベンチには、仄かな香水の匂いが残されていた。清涼とした柑橘系の香りに果実のエッセンスを加えたような、甘ったるくどこか幼い匂いだ。昨夜、死人のように青ざめた年若い女性が一人、寒さに震え、安っぽいビニル傘を重たい雨に打たせながら、小一時間ほどここに座っていたのである。濡れたコンビニ袋の中には、烏龍茶のペットボトルと冷めたおにぎりが一つ。

思うに、初めのうち彼女は、何か悲壮な決意をしていたようだ。思い詰めたようなその瞳子は、まるで屠殺される運命を知ってしまった家畜のように黒い悲しみで濁り、何かの拍子に感情が昂ぶるらしく、膝の上に置いた華奢な拳を固く握りしめ、時折しゃくり上げながら肩で息をしていた。

じっと耳を澄ますと、心臓の鼓動が二つ聞こえてくる。

そうか……。

ねえ、生んであげなよ、お腹の子供。この世でたった一人の、君

の味方だよ。
私は、時間を掛けて優しくこんこんと説いた。ときに子守唄のように、ときに学校教師のように。
「だって……、父親が誰かも判んないのよ」
でも、ここでこうして生きているじゃないか。生まれ出る日を夢見て……。
「……私、もう、どうしていいか分からなくって」
夜の雨は、小降りになったり激しく降ったりを何度も繰り返していた。誰だって、そんな人生を歩んでいるんだ、晴れた日ばかりじゃない、君も、私も、私も……そして、きっとお腹の子供だって。
「私に、シングルマザーになれって言うの？　無理よ、育てていく自信なんてないわ」
彼女の顎から水滴が垂れ、コンビニ袋の上にかさりと落ちた。
ご両親は、御健在かい？
「ええ……、二人とも元気よ。でも私の事なんて、とっくに見放しているの。私、悪い子だったから……」
大丈夫、君が一生懸命に子供を育てている姿を見せてあげれば、きっと力を貸してくれるさ。孫を抱かせてあげなよ。
「……」
君は、芯の強い娘だ。どういう訳だか、私にはそれが分かるんだ。

あとは何も言わなかった。最後は自分で決断するしかない。
最初、セミロングの髪が膝に触れるほどに俯いていた彼女の顔が、少しずつ、少しずつ、正面を向き始めた。そして最後には真っ直ぐ前を見つめたその瞳の中に、強い意志の光が宿っているのを、私は見た。
やがて彼女は、ゆっくり立ち上がると傘を折りたたみ、雨粒が蹌蹌と渦を巻く暗い曇天を見上げた。蝋石のような白い面に雨が容赦なく降りそそぎ、すぐに霧氷のような膜をつくって街灯の青白い光を跳ね返した。そっと目を細め、そして、その長い睫毛に真珠のよ

うな水滴を乗せながら……やがて彼女は微笑んだ。
強くならなくちゃね、だって君は、もうお母さんなんだから。
「そうね……」
自分に言い聞かせるようゆっくり頷くと、彼女は、再びビニル傘を広げ静かにここを去っていったのだ……。

あれでよかったのか……？　私は、無責任にも他人の人生に土足で踏み込んでしまったのではないか？　今の私に、他人を諭す資格があるのだろうか……？
すっかり乾いて白い粉を吹いている公園ベンチの木目に沿ってぼんやりと目を這わせながら、私は無性に煙草が吸いたくなって無意識に背広の内ポケットを探った。指先に触れたのは、煙草ではなくペパーミント味のガムだった。
そうか、煙草はとっくの昔に止めていたんだ。

不意に、大きなむく毛の犬が、不思議そうに私を見ながら立ち止まった。ふさふさの栗毛がセルロイドのように眩く朝陽を反射して、何やら神聖な動物を連想させる。むく犬は、じっと私の顔を見つめ、長い舌を垂らしながら機関車のように断続的に白い息を吐いていたが、飼い主であるジャージ姿の中年女性がナイロン製のリードを軽く引いてうながすと、名残惜しそうに何度も何度も私の方を振り返りながら遠ざかっていった。飼い主の女性が、一度だけこちらに訝しげな視線を投げかけ、首を捻った。
ああ、あの犬には私の姿がみえるのか……。
私は、口の中にガムを放り込んだ。

そろそろ出勤の時間帯らしく、私のいる公園の周りにも足早に職場へと向かう人々の喧噪が満ちてきた。おかしなものだ、ついこの間まで私もあの中の一人だったというのに……。
私は、外資系の商社に勤めるごく平凡なサラリーマンだった。ほ

んの七週間前までは……。
地方で開催されるイベントの準備を終え、深夜、出張先のビジネスホテルで報告書を書いたあと、熱いシャワーを浴びたところで私の生前の記憶は途切れている。
次に見た光景といえば、明かりもつけず薄暗いままの夕暮れのダイニングで無邪気にレトルトのカレーを頬張る娘と、泣きはらした顔でただ茫然とそれを見守る喪服姿の妻がいる我が家の食卓だったのだ。私は、既にこぢんまりとした白い箱に成り果てていた。
こうも簡単に自分の一生が幕を閉じてしまうなんて……。

と、その時私は、はっとして顔を上げた。目の前を、肩を落とし足を引きずるようにして歩く一人の女学生が、幽鬼のように陰々と通り過ぎたからである。
彼女の心の声が奔流のように私の耳に流れ込んできた。
「ああ、学校に行きたくない行きたくない行きたくない行きたくない行きたくない……」

続く……。

秋の幽霊（中）

「パパもママも、何も分かってない。先生だって真剣に悩みを聞こうとはしないわ。祐子や美香だって最後には、あたしを裏切ったのよ。クラスのみんながあたしを無視するの。どうして……どうして、みんなあたしにそんな非道い事をするの？　ああ、いやだいやだいやだいやだいやだ……」

私は、ゆっくりとベンチから立ち上がり、しょんぼりとうなだれて歩く女学生の後を追った。

「みんなが、あたしの事をいじめるいじめるいじめるいじめる……」

陽は、さっきより少し高いところまで上り、公園の遊歩道に敷き詰められた枯葉の絨毯を温めている。彼女の脇を、元気よく談笑しながら自転車のペダルを踏む男子学生が数人、勢いよく通り過ぎた。その溌剌とした様子があまりにも彼女と対照的だったため、私の目には、より一層このしょんぼりと俯いて歩く女学生が淋しげに映ったのだ。

「あたしなんか消えて無くなればいいんだわ。そうだ、消えてしまおう。死んでしまおう……」

待ちなさい、死んでは駄目だ。

私は、たまりかねて彼女の心に語りかけた。

「いやだ、あたしは死ぬんだ。きっと、みんなもその方が嬉しいに違いないもの。そうよ、死んでやるのよ。死んでやる死んでやる死んでやる死んでやる……」

こういう状況で、死ぬ気になれば何だって出来るとか、生きていればきっと良い事もあるなんて言っても、自殺を考えてしまうような精神状態の人には届かない。自殺願望に取り憑かれた段階で、もうそんなポジティブな発想を受け入れる余地は無くなっているのだ。

ただもう、早く死にたい。その事しか考えられなくなってしまう……。

「ああ、死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい……」

よし、じゃあ君はもうすぐ死ぬ。

「え？」

彼女の歩みが止まった。私の体を素通りした陽光が、その儚げな背中を淡く照らす。彼女の俯いた顔は、その前途に伸びる長い影と一体になって陰々滅々とした心の闇を体現していた。

君は、もうすぐ死ぬ、と仮定してみよう。

私は、彼女の肩にそっと手を置いた。

いいかい？　目を閉じて想像してごらん。医者に見放された君は、死を宣告され今病院のベッドの中にいるんだ。腕には四六時中点滴の針が刺さっている。小さな窓から見える景色は、隣の病棟のひび割れた壁だけさ。だから君は、ただ黙って天井を見つめているしかないんだ。

生気の無かった彼女の瞳が、ゆらゆらと宙を彷徨っている。私が語る状況を心の中で必死に思い描いているようだ。

君は、毎日毎日病院で出される味気ない食事ばかり口にしている。でも、君はもうすぐ死んでしまうんだ、最後に何か食べたいものってないのかい？

「……」

彼女は、暫く考え込んでから、ぼそりと呟いた。

「……ときわ堂のシュークリーム」

ほう、それは美味しいの？

「うん、あたしが小さい頃、ママの買い物についていくといつも帰りに買ってくれたの。食べるとカリカリしてて、でも中には甘いカスタードクリームがたっぷり入っていて……ああ、最後にもう一度あれが食べたかったなあ」

そう、それは美味しそうだね。……他に食べたいものは？
「あ、あとは……そうねえ、オレンジハウスのクレープかしら。中学校のすぐ側にあったのよ。学校帰りによく祐子や美香たちと食べたわ。ブルーベリーシロップがほんのり甘酸っぱくて本当に美味しいの」
ふーん……、他にもあるでしょう、食べたいもの？
「あとね、あとね、市民プールの地下食堂にあるお好み焼き屋さんがとっても美味しかったのよ。それとね、夏に祐子たちと海水浴に行ったときに見つけたパスタのお店のね、夏限定だったかしら、シーフードのやつがとても美味しくって、あれがまた食べたいなあ……。あっ、そうそう、雑誌に載っていた評判のカレー屋さんを探しに行ったのよ。美香ったら最初ぜんぜん乗り気じゃなかったくせに、食べてみたらすごく美味しいって、絶対また食べに来ようねって……」
ここで私は、ぽつりと言った。
でも、君はもう死んでしまうから食べられないんだね……。
「……そうね」
彼女は、傍目にも分かるほどがっくりと肩を落とした。
「もう食べられないのね……」

忙しく行き交う人々から隔絶されたように、彼女はぽつねんと佇んでいた。私は、出来る限り優しい声で語りかける。
さっきの続きだよ。君が閉じこもる病室には、日に一度ご両親が見舞いに来る他は、滅多に訪ねて来る人なんていない。もちろん病院の中だから携帯電話なんて使えないんだ。でも、死ぬ前にあの人だけには会っておきたい、そんな人いるんじゃないかな？
彼女は、また暫く視線を游がせていたが、思いついたようにそっと呟いた。
「……きーぼう」
きーぼう？

「清美っていうの、小学校でいっしょのクラスだったけど、五年生のときに福岡へ引っ越してしまったわ。とっても仲が良かったのよ、あたしたち……。校庭の隅にある黄色いジャングルジムの側にね、一緒にタイムカプセルを埋めたの、大人になったら掘り出しに来ようねって……。今頃どうしてるかなあ……もう一度だけ会いたいなあ」

きっと元気で頑張っているさ、他に会いたい人は？

「うーん……中学の時、美術部の顧問だった大森先生かな。いい歳して独身でね、シャツとか裏返しに着てたりして変なオジさんなの。でもとっても優しいのよ、よく部員のみんなと色んな所へ連れていってもらったわ。大森先生、ちゃんとお嫁さん貰えたかしら……ああ、会って確かめたいわ」

きっと綺麗な奥さんの尻に敷かれているさ。他に会いたい人は？

「あとはそうね……、中学のとき好きだった高梨先輩。あたしね、卒業式の日に待ち伏せして制服のボタン貰っちゃったの。先輩ったら女の子にモテるから私にくれたのが最後のボタンだったのよ。私の事まだ憶えててくれてるかなあ……。あっ、そうそう、北海道にいる妙子おばさんにも暫く会ってないわ。ねえ聞いて、あのあばさんったら変なのよ、馬とお話が出来るの。そっちの景気はどうだい？　なんて馬に訊くのよ、可笑しいでしょ？　昔はよく馬の背に乗せてもらったんだけど……お元気かしら？　それとね、去年、山王社のお祭りで仲良くなった杏子ちゃん、一緒に神輿を担いだのよ。彼女ったら男勝りで、男の子と喧嘩したって負けないんだから。そういえば、どうしてるかな。メルアド交換したけど全然連絡していない……」

君のお葬式に来てくれるといいね。

「……来るわけないじゃない、あたしが……死ぬ事知らないもの」

そうだね、みんな君が元気で頑張っているものと思い込んでいるだろうね。まさか自殺してしまうなんてね。

「そ、そうね……」
君……、もう死んでしまうんだけどさ、もし生きていたと仮定してだよ、将来の夢とかはなかったの？
「……看護師さん。昔パパが入院したときね、あたしすごく心細かったの。だって、その頃ママもまだ働いていたし、家に一人でいても淋しいからいつもパパの病室にいたのよ。でもパパとはあまりお喋り出来なかったから、看護師のお姉さんが遊んでくれたの。とっても優しくて綺麗で、ああ、私も大きくなったらこんな素敵な看護師になって、患者さんを勇気づけてあげたいなって……」
立派な夢だね。
「ふふふ、でもね漫画家にもなりたかったのよ。私の絵、みんな褒めてくれるの。上手だねって、将来きっと漫画家としてデビュー出来るよって……あたしったらすぐその気になっちゃって」
一心に信じて頑張れば、夢は叶うんじゃないかな？
「そうかなあ……、でも最近は、通訳の仕事がしたいなって思うようになったの。英語の授業が楽しくって。高校を卒業したら、外国語を勉強する為にお金を貯めてヨーロッパを旅するの……ホームステイだってするわ……遠い国で……素敵な……出会いを……して……」
彼女は、両手で顔を覆い肩を激しく上下させ始めた。細い指の間から嗚咽が漏れる……。
「あたしは……あたしは……」
私は、じっと次の言葉を待った。
「……」
言ってごらん。
「いや」
誰にも言わないから僕にだけ言ってごらん。
「いやいやいや」
今しかそれを言うチャンスはないよ。
「……死にたくない」

もう一度。
「あたしは、死にたくなんかない、生きていたいの」
そう、その調子だ。
「まだまだ、やりたい事がいっぱいあるの、生きていたいの生きていたいの生きていたいの……」
私は、優しく彼女の肩を抱いた。
大丈夫、君はまだ生きている。ここでこうして生きているんだ。
彼女の髪をそっと撫でた。
まだ、ちゃんと生きているんだよ。よかったね……。
「……うん、ありがとう」
負けちゃ駄目だ、強く生きるんだ。そして美味しいものをいっぱい食べて、友達をたくさん作って、そして一歩一歩夢を実現させてゆくんだ。君には、まだそれが出来る。だって生きているんだから……。
ここで彼女は、ゆっくりと顔を上げた。綺麗な顔立ちの娘(こ)だ。最初会ったとき幽鬼のように青白かった頬が薄っらと紅潮しているのが分かる。瞳にも輝きが戻り、明鏡のように澄んで秋の蒼天をきらきらと映しだしていた。
もう大丈夫だ。
「あなたは誰なの？」
僕は、もう死んでしまった人間さ。君とは違いもう未来がない。だから、君がとっても羨ましいんだ。辛い事があっても頑張るんだよ。
「うん、本当にありがとうございました」
そう言って、彼女は歩き出した。その足取りは、先程とはうって変わって力強いものだった。そんな後ろ姿を見ているうちに、私は、何故だか無性に自分の娘の顔が見たくなった。
妻には、昨日お別れを言った。娘の寝顔にも別れを告げた。今日は、私の四十九日。もうすぐ彼岸へ旅立たねばならない。最後に、

どうしても元気で微笑む娘の顔が見たくなったのだ。

続く……。

秋の幽霊（下）

娘は、今年六才になる。

あやという名前は、妻と二人で考えたものだ。

妻と一緒に暮らし始めたのは、ちょうど私が失業中の時期だったため、お陰でろくに結婚式も挙げられず、当時私は妻に対してずいぶん引け目を感じていたものだ。たいぶ後になって学生時代の友人やら有志が集まって、ようやくささやかな結婚式の真似事が出来たときには、娘はすでに妻のお腹の中にいた。

だが、運悪く逆子だったため、妻は帝王切開を余儀なくされたのだ。

予定日よりだいぶ早く生まれてきた娘は、抱き上げると壊れてしまいそうなほどの未熟児であったが、健気にも精一杯の産声を上げる小さな小さな生命だった……。

ちゃんと育ってくれるのだろうか……？　我が子を初めてこの手に抱いて、最初に受けた印象がこれである。その姿は何とも儚げで、今にも生命の灯が消えてしまうのではないかと、当時の私は、全く気が気でなかった事を覚えている。

しかしそんな私達の心配をよそに、娘のあやは、病気らしい病気一つせず、すくすくと育ってくれた。

親の欲目ではないが明眸皓歯（めいぼうこうし）、天使のように朗らかな娘だ。

陽は、すでに高い所にあり、公園の向かいに建つ小さなカトリック教会の三角屋根にそびえる十字架が、下界に向けて神々しい反射光を送っている。腕時計に目をやると時間は十一時四十五分。私の正確な死亡時刻は、十二時十三分であるらしいから、もうあまり時間がない。私は、底のすり減った革靴で落ち葉を踏みしめながら、娘の通う小学校へと歩き始めた。

街路樹のナナカマドは、既にその硬い枝一杯に紅い実を付けており、それを目当てに集まる小鳥たちの囂(かまびす)しい鳴き声がコンサートホールの喝采にみたいに頭上から降りそそいでくる。だいぶ気温も上がってきたようで、公園に隣接してドミノのように整然と建ち並ぶ都営住宅のベランダでは、洗濯物が万国旗のようにはためき、天日干しする布団をぱたぱたと叩く乾いた音が秋晴れの空高く吸い込まれていった。

吹き抜ける風は頬に優しく、冷たい中にも太陽の匂いをたっぷりと含んでいて心地良い。カフェテラスの入口に吹き溜まった紅や黄色の落ち葉がつむじ風を孕んで舞い上がるたびに、驚いて立ち止まる通行人の見せる、何だか少し嬉し気な表情が妙に可笑しかった。

歩きながら私は、ふと秋冬物の子供服がディスプレイされたショーウィンドウを覗き込んだ。冬をイメージして、発泡スチロールの雪がまんべんなく敷き詰められたその中には、流行色に彩られたお洒落な洋服や小物が所狭しと展示され、モノクロームな街角にあってそこだけ別世界のように華やいで見えた。素敵な服に身を包み、可愛らしくポーズを取るマネキン人形に我が娘の姿を重ね合わせ、私はひとりでに頬が緩むのを感じた。

そう言えば、あやも去年に比べずいぶんと背が伸びたようだ。一年前に買った服は、もう着られないんじゃないかな。確かファーの付いたダウンジャケットが欲しいと言ってたな……。これなんか、いいんじゃないか？　ピンク色で可愛いし……。

しかし、ウィンドウに陳列された商品を物色しているうちに、本来その窓ガラスに映り込んでいるはずの自分の姿が空気のように透けている事に気付き、途端に心が萎えてしまった。

ああ、私は今この長閑な秋の景色とは乖離した存在なのだ……。

娘の通う小学校の校舎は、去年、全面改修工事を終えたばかりで、

未だ新築のように小ぎれいな外観を保っていた。今年の春、アンティーク人形のように着飾った娘の手を引いて入学式に訪れたときには、通学路に沿って八分咲きの桜がその可憐な枝をアーケードのように張り出していたのを憶えている。今は校門の辺りまで続く花壇にびっしりとヒマワリの花が植えられ、その合間合間に生徒達が作ったものであろう、ペットボトルの風車がカラカラと小気味よい音を立てていた。

早いものだ、あの娘(こ)が小学校に入学して、もう半年になるのか……。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

次第に下駄箱の辺りで生徒達のざわめきが膨れあがり、やがてそれは、正面玄関が開け放たれると同時に一斉に表に吐き出された。その欣喜雀躍(きんきじゃくやく)とした生徒達の姿を見た途端、私の心にずきんと痛みが走った。

今日は、授業参観日だったのか……。

どの生徒も自分の母親の、あるいは父親の手に引かれ、少し照れながらも幸せそうな笑みを湛えている。

私は何だか気まずくなり、校門の脇に生える大樹の根本に身を隠しながら、次々と目の前を通り過ぎてゆく親子連れの姿を見送った。

娘はどこだ、まだ出てこないのか……？

やがて大方(おおかた)の生徒が下校し、閑散となった玄関に茫然と目を走らせながら、私はあれこれと考えを巡らせた……。

私が、取引先の業務部長に頼まれ半ば強引に入らされた生命保険は、掛け金が高い割に保障の内容が貧弱で、契約書の隅っこにはルーペをかざして見なければ読めない程の小さな文字で、免責事項がびっしりと書き連ねてあった。結果、私が死んで七週間が経つというのに未だに保険金は下りていない。生命保険会社の調査員が契約書の免責事項を楯に、ああでもないこうでもないと支払いを拒むの

だ。もちろん保険会社の言い分は必ずしも正しくはないので、裁判で争うという手もあるのだが、家出同然で私と一緒になった妻にはそこまで立ち入った事を相談できる相手もなく、今では半ば諦めてしまっているように思える。

万が一にも自分が妻と娘を残して死ぬなどという事は考えてもみなかったので、こうなってみて初めて自分の迂闊さに気付き反省することしきりだが、もはや後の祭りであった。

気丈にも妻は、破鏡の嘆きが癒える間もなくパート従業員としてスーパーでのレジ打ちの仕事を始め、必然的に娘は、いつも独りぼっちになってしまった。

恐らく今日、この授業参観に妻が来ている可能性は低いだろう……。そうか、きっと娘は、私の四十九日の法要に出るため、今日は学校を休んでいるに違いない。

私がそう独り合点したときである。

校舎の正面にある重たいガラス戸を押し開け、しょんぼりと俯いてこちらにやって来る一人の少女を見つけた。

娘だ……。娘のあやだ……。途端に、私の視界が涙でかすんだ。

親のいない気まずさに、他の生徒たちからわざと遅れて出てきたのであろう、怒ったような顔で地面を見つめながら、赤いスニーカーを引きずるようにして歩いて来る。

あや、パパだ、パパはここにいるぞ！

無意識にそう叫んだが娘に聞こえるはずもなく、私は、我を忘れ夢遊病者のようにふらふらと我が子に駆け寄った。

あや、ごめんな、淋しい思いをさせてホントにごめんな……。

そう言って、その儚いほど華奢な肩をぎゅっと抱きしめた。そのとき不意に木枯らしが吹き抜け、娘の小さな体は、私の手をすり抜けてその場にうずくまった。どこか後ろの方で、空き缶がカランカランと音を立てて転がってゆくのが分かる。

私は、娘を思う存分抱きしめる事が出来ない己の両手を見つめ、

悔悟の涙にくれた。

ああ、私はどうして、もっと、もっと、何度も、何度も、娘を抱きしめておかなかったんだろう。望めば、何十回でも何百回でも、この腕で愛しい娘を思いっきり抱く事が出来たのに……。

生きている間なら……、生きている間だったら……。

不意に私は、大学二年の夏、盆花売りのアルバイトをしたときに仏具屋の店主が言ったことを思い出した。

「人というのは、本当におかしな生き物さ。身内や友人が健在な時には邪魔っ気にしたり、ぞんざいに扱ったりしているくせに、いざその人が死んじまうと、やれ高価なお線香を焚いてやろうだの、やれ生前好きだったお菓子を供えてやろうだのと、途端に仏心を出しやがる。馬鹿な話さ、死んじまった者に優しくしたって何にもなりゃあしないのに……。生きてるうちさ……、生きてるうちに、美味しい物を一緒に食べ、楽しい話をたくさんしておく事だ。死んだ後になってあれこれ気にかけたって、もう遅すぎるのさ……」

娘がゆっくりと立ち上がった、その小さな背中に負ったピンク色のランドセルにバランスを崩しながらも……。

私は、娘の両肩に手を置き、その顔を正面から見つめた。

あや、聞いてくれ……。私は、君と、もっともっとお話がしたかった、一緒にご飯を食べたかった、一緒にお散歩がしたかった、一緒にドライブに行きたかった……。

私の両目からは、止めどなく涙がこぼれ落ちる。

君と一緒に桜の花が見たかった、海で泳ぎを教えてやりたかった、川辺に花火を見に行きたかった、紅葉狩りを楽しみたかった、スキーを滑りに行きたかった……。

首が折れそうなほどうなだれて佇む娘に向かって、私の心の声が

洪水のように溢れ出た。
君が運動会で元気に走る姿が見たかった、君のはにかんだセーラー姿が見たかった、君が照れながら紹介するボーイフレンドを見たかった、君がブーケを抱きしめる花嫁姿が見たかった、君がママになって子供をあやす姿が見たかった……。

その時である、娘がはっとして瞳を輝かせ、驚いたように顔を上げたのだ。
「……パパ？」
え？
「ねえ、パパ……そこにいるの？」
娘を見つめる私の目が、ゆらゆらと揺れ動いた。
あや、私が分かるのかい？　パパがここにいる事が分かるのかい？
瞬きも出来ないでいる娘の円らな瞳から、すうっと涙がこぼれ落ちた。その視線は、何かを探し求めるように宙を彷徨っている。恐らく私の姿を捉えてはいないのだろう、目に見えない私に向かって必死に呼びかけてくる。
「パパ、どこなの？　どこにいるの？　ねえお願い、返事して、パパ！」
ここだよ、パパはここにいるよ。いつだって君のことを見ているよ。
私がもう一度娘を抱きしめようとしたそのときである。不意に私の体が重力から解放されふわりと舞い上がった。
うわあ！　ちょ、ちょっと待ってくれ。
腕時計の針が十二時十三分を指していた。
もうしばらく待ってくれないか、私はまだ娘と別れたくない。せめて、せめて最後にあの子の笑顔を見たいんだ……。
私の体が娘からぐんぐん引き離される、三メートル、四メートル、五メートル……。
「パパぁ！」

娘が宙を引っかき回すように手をさしのべ、二歩、三歩とこちらに歩み寄ってくる……。
あやっ！
私も精一杯娘に向かって手を伸ばした。その二人の間を数台の路線バスが通り過ぎる。小さな両手を一杯に広げ、目に溢れんばかりの涙を溜めた娘の姿がコマ送りになった。
「パパーっ！　さようならーっ！」
……あや？
その瞬間――――娘が笑った。
「会いに来てくれて、ありがとーっ！」
涙に濡れた白い頬に小さな小さな笑窪をつくって、最後にほんのちょっとだけ――――娘が微笑んだのだ。
あや……さようなら、元気で、一生懸命に生きるんだよ、そしてママの事をお願い。パパは……パパは、六年間君のパパでいられて、とっても嬉しかった……。
娘がまだ何かを叫んでいるようだが、もう私の耳には届かなかった。ああ、最後に伝えてやりたい……私のこの想いを……。
パパは、ずっと、ずっと君の事を……。
その瞬間、私の体はもの凄い速さで天に向かって駆け上がった。十メートル、二十メートル、三十メートル……。一切の景色が引き伸ばされたように、ぐんぐん遠ざかる。
――ずっと君の事を愛しているよ。
やがて、涙で霞む視界の真ん中で……娘の姿が点になった。
秋の幽霊……終わり

秋の幽霊（下）（後書き）

読んで下さり、ありがとうございました。もしよろしければ、感想などをお聞かせ下されば嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4134f/

秋の幽霊

2010年10月8日15時16分発行